

そう だい
総 題 「ヨハネの黙示録」

だい か なな きょうかい
第3課 七つの教会へのイエスのメッセージ

ひらもと あきら
平本 光

こんしゅう ぜんかい きょうかい つづ のこ むつ きょうかい まな
今週のガイドは、前回のエフェソにある教会に続き、残りの六つの教会にあてたメッセージから学びま
す。

あんそくにち ごご こんしゅう
1. 安息日午後：今週のテーマ

これらのメッセージは七通の手紙として七つの教会に別々に送られたものではなく、一通の手紙としてまとめ
られていました。ですからうちの教会はこのような状況(様子)におかれているという以外に他の教会の
状況(様子)も確認することができました。

ほか きょうかい
他の教会にあてられたメッセージであっても全体の教会にそれぞれ書かれた内容から確認することができ
ます。

この七つの教会に対して書かれたメッセージから自分の教会と似ているところを見つけるだけでなく、全ての
教会のそれぞれの問題や素晴らしい働きなど様々な視点から、イエス様が私たちに与えようとされている希望
を見つけていきましょう。

にちようび きょうかい
2. 日曜日：スミルナとペルガモンにある教会へのメッセージ

スミルナはギリシャの重要な貿易のために人々がよく利用する場所にありました。そして政治や宗教、文化
の中心となる港町でした。

スミルナの町はローマ皇帝崇拜の中心地で、「わたしは皇帝を崇拜することを認めます」という証明書を持
たないと生活ができませんでした。そのような中でキリストを信じて生きることは難しく、迫害(圧力をかけて
苦しめること)されていました。

スミルナにある教会へのメッセージから、クリスチャンがローマ帝国によって激しく迫害された時代について
考えることができます。

ヨハネの黙示録2:10で「十日の間」とある表現は、一日を一年として、激しい迫害が十年間あったこと
を表しています。

また、ペルガモンは「サタンのおうざの王座」と言われるほど、ギリシャ神話に出てくる神を礼拝する神殿が多い町でし
た。

ローマ皇帝に対する崇拜も命じられており、それを拒否して生きるクリスチャンは迫害されていました。

それでもほとんどの人たちは迫害を恐れず、キリストに忠実に従っていました。

しかし、クリスチャンの中に、皇帝崇拝やそのほかの自分の信じるキリストとは違う神に従う生き方に妥協する(合わせてもまあいいかという)方法を進める人もいました。それは民衆記に出てくる「バラム」のようでした。バラムの最後は剣によって殺されるというものでした。このような死を迎えることの内容に「悔い改め」でキリストとの関係において一番良い道を選ぶことがすすめられています。

ペルガモンにある教会へのメッセージは、およそ西暦313年から538年の教会が誘惑と妥協と取り組んで正しくキリストに従う人々がいる中で霊的な衰退が進むことを預言的に描写しています。

3. 月曜日：ティアティラにある教会へのメッセージ

ティアティラは職人の組合(ギルド)がある一番中心の町でした。この組合に入っていないと、ちゃんとした商売ができませんでした。そして組合には、それぞれの守護神があり、その守護神のお祭りなどの行事に参加しないと懲らしめる罰を受けることや、仲間外れにされてしまいました。ですから、当時のクリスチャンは妥協して(合わせてもまあいいかという)周りの人に従うか、キリストを信じて仲間外れになるかのどちらかを選ばなければなりません。イエスはティアティラの教会を「わたしは、あなたのわざと、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐とを知っている。また、あなたの後のわざが、初めのよりもまさっていることを知っている。」(ヨハネの黙示録2:19)と表現しています。しかし、ティアティラは、イエスが「イゼベル」と表現する悪い影響を与えるものを知らないふりして見逃していました。

イゼベルは、イスラエルを背教に導いたアハブ王の妻です。ティアティラにある教会は西暦538年から1565年のキリスト教の状況を象徴しています。このころの教会は、外部ではなく内部の危険にありました。聖書以外の教会の中のしきたりや偉い立場にある人の言葉を重視しました(とても大切だと思っ

て見る)。キリストではなく、人やモノが大切にされ、行いが救いの手段とされていました。ですが、イエスはティアティラにある教会の信仰と愛、行いと奉仕をほめています。これはその後の改革と聖書を第一と考える流れの始まりを示すものでした。

4. 火曜日：サルディスにある教会へのメッセージ

サルディスは立派な城壁を持つ町でしたが、城壁が守ってくれると安心してしっかりと守ることを怠って(しないで)無防備にして(危険だと思わないで)のんびりして)いました。

イエスは教会が過去の良い状態のまま、進歩を止めた、死んでいるような状態をみて、サルディスのようだと表現しています。イエスは、目を覚まし、最初に福音を聞いてどのように受け入れたか思い起こすように教会を励ましています。サルディスにある教会へのメッセージは、宗教改革あとの時代の状態を指しています。この時代の教会は生き生きとした気力を失った形式主義の状態でした。神への献身を新たにする方法は、いつも福音を受け入れた最初の情熱をもって(熱心に)心を神の御心で満たすという、純粋な献身、この一つ

だけです。

5. 水曜日：フィラデルフィアにある教会へのメッセージ

フィラデルフィアは繁栄した街でしたがよく地震の起こる地域でした。立派な町ですが、いつ崩れるかわからない弱さを持っていたのです。サルディスの教会とは違い、フィラデルフィアは何も責められていません。フィラデルフィアの教会はイエスの言葉を守り、イエスを否定することがありませんでした。しかし、この教会は霊的に強くなく、異なる宗教の影響に苦しんでいました。しかし、彼らの弱さに注意するのではなく、イエスは受け入れる門を開かれます。困難なことがあっても試練の時にキリストに忠実な人々を守ってくださることを教えています。

またフィラデルフィアの教会の状況は18世紀と19世紀のキリスト教の状況と照らし合わせる事ができます。欧米を中心にプロテスタントのリバイバル運動（再びキリストに対する信仰をもって立ち上がること）が広がった時期です。リバイバル運動はキリストの恵みを通して救いを得られると信仰を生き返らせ、クリスチャンの交わりと自己犠牲の精神を回復させました。

6. 木曜日：ラオディキアのクリスチャン

ラオディキアは黒い羊の毛を売ってお金を得て銀行のようなものを持っており、目に塗る薬を作る技術もあったので裕福でしたが、水を得るのは不便な場所でした。運ばれてくる水は町に送られてくるころには熱くも冷たくもない生ぬるいものになっていました。ラオディキアは、引かれてくる町の水の状態を用いて、教会員の状態も生ぬるい状態だと注意しています。自分たちには十分な持ち物があるので何の必要も感じられなくなっていました。

そのようなラオディキアの教会にイエスは三つのものをイエスから求めるように勧めています。

1. 火で精錬された金を求めること。何よりもキリストを愛する信仰が与えられる。
2. 裸の恥をさらさないようにする白い衣（光の衣ともいわれる福音を信じて救われ、正しいものとされている恵みを証しするもの）をイエスに着せてもらうこと。
3. 目を癒す目薬を求めること。キリストが与えてくださる救いを受け継ぐ価値がどんなに絶大なものか見ることができるよう、目にいやしを与える薬を与えてもらえるように求める。

そしてこれらの三つのものは、自己中心からくる高ぶった態度や現状への自己満足、神様を見ず自分の力で生きているという考えを手放し、自らを明け渡す必要があることを教えています。

今年の干支はいのし、十二支の12番目「亥」年です。それに合わせて、「猪突猛進で今年も頑張っ

す」などという言葉を耳にします。【猪突猛进】とは、一つのことに向かって、向こう見ずに猛烈な勢いで、つき進むこと、ということのようです。またイノシシが真っすぐにしか進めないところからきていると言われていす。しかし実際のイノシシは他の動物と同じように前進している際、目の前に危険が迫った時や危険物を発見した時は急停止するなどして方向転換することができ、真っすぐにしか進めないという認識は誤りであるということも見てただまっすぐ進むというより目標に向かって、いろんな問題をぶつかって終わるのではなく切り開いていくというイメージがっております。先週と今週の七つの教会の状態から、キリストに対する信仰をしっかりと持ち目標に向かい進めるようにみ言葉を学び、祈りつつ前進してまいりましょう。